

ノーモア・ヒバクシャ通信 第20号

発行 2014年12月26日

ホームページ <http://www.kiokuisan.jp/>
継承ブログ <http://keishoblog.com/>

発行者 ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会
〒102-0085

東京都千代田区六番町15プラザエフ6F

Tel/Fax 03-5216-7757 (直通)

Email hironaga8689@gmail.com

郵便振替口座 00170-5-694752

(口座名義) ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産基金

事務局は、1月6日(月)まで、年末・年始の休暇に入ります。

今年一年、いろいろお世話になりました。よいお年をお迎えください。

★もくじ

I. 被爆70年を迎えるにあたって ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会代表理事 岩佐幹三	P 1
II. ヒロシマ・ナガサキを語り受け継ぐつどいのご報告	P 3
III. 資料収集作業グループの報告	P 6
IV. 継承センター設立委員会の報告	P 7
V. 関連企画など	P 8
VI. 2014年度会費納入と「紹介パンフ」普及のお願い	P 10

I. 被爆70年を迎えるにあたって

ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会代表理事 岩佐幹三

来年、2015年という年は、原爆被爆、戦争終結から70年になります。そして私たちの会を結成してから丸3年。大きく飛躍する年にしたいと思います。

今日までに私たちは、会の基盤となる「継承センター」の基本構想を作り上げました。その構想の具体化をめざして「継承センター設立委員会」で協議、検討を重ねてきており、私たちが目指すべき「継承センター」の具体像とその実現へのプロセスを、次の総会にはみなさまにご報告できると思います。

この間、会では、「記憶遺産の継承」のための活動を展開してきました。

日本被団協関係の各種の文献資料や、被団協運動のリーダーだった方々の資料の収集・整理が、各地の被爆者のご遺族のご協力と、大学の専門家のご指導および学生のみなさんの参加を得て、着実に進められています。

会のホームページや継承ポータル、継承ブログなど、インターネットでの発信は、若い会員が担当者となり、進めています。

日本被団協と共同で制作した映像作品「被爆者が証す原爆の反人間性シリーズ」第1回作品を完成、日本語版はすでにインターネットで公開し、英語版ももうすぐ公開予定です。

被爆体験を語り受け継ぐ活動は、「語り受け継ぐネットワーク」が中心になって各地で

「被爆者の証言を聞くつどい」の開催を重ね、聞き取った証言を書き起こし、インターネットでの公開や、2015年NPT再検討会議にむけた「被爆者からのメッセージ」作成に取り組みました。12月13日に開催した「ヒロシマ・ナガサキを語り受け継ぐつどい」は、100人の参加者で活気ある意義深い集まりになりました。

国際ネットワークに参加する動きとしては、9月19日から22日、韓国の老斤里（ノグンリ）平和公園で開かれた第8回国際平和博物館会議に、岩佐と伊藤和久事務局長、木戸季市事務局（日本被団協事務局次長）の3人で参加しました。さまざまな平和の課題について報告や議論が重ねられ、交流の輪が広がるとともに、ネットワークというものの意義と大切さを確認することができました。ノグンリは、韓国の首都ソウルから南へバスで3時間余りの所にあります。そこは、かつて朝鮮戦争のとき、アメリカ軍が迫りくる北朝鮮軍の攻撃を避けて退去する際、住民を守るどころか銃撃を加えて大虐殺した悲劇の地でした。かろうじて生き残った住民、遺族の人たちは、長年をかけて大惨劇の実相を究明し続け、遂に韓国政府もその事実を認めて死没者の名誉は回復され、この地は韓国唯一の平和公園に指定されたのです。私は、戦争というもののおぞましさに憤慨を覚えるとともに、ノグンリ市民のたたかひの歴史は私たちにとって大切な教訓になると考えさせられました。

ネットワークづくりは、この会にとって重要な課題です。国内では、広島、長崎の資料館、祈念館をはじめ各地の大学や研究機関、図書館などで膨大な文献や資料が保存されています。私たちの会が、その有効な活用のためにどのようなネットワークを組んで交流を深めていくか。これは「継承センター」の基本構想に基づき、継承センター設立委員会でも協議しています。

被爆者の高齢化が急速にすすむ一方で、戦争と原爆の被害を知らない人たちが多数を占めるようになってきました。しかし、世界には今もなお1万7000発もの核弾頭が存在し、使用しないという国際的な約束はありません。このような中で、過去の負の遺産を風化させてはなりません。70年にわたって原爆被害との苦悩に満ちたたたかひの道を歩み続けてきた被爆者と、戦後の平和な空気の中で育ってきた世代の人たちとの架け橋の役割を果たすのも、私たちの会だと思っています。さまざまなアンテナ網を張って情報を集約し、ネットワークをつくって大きく輪を広げ、国際世論の高揚に貢献していくことも、将来に向けた活動の構想としては大切なことだと思っています。

私は11月下旬に自宅の庭で転倒して左足ふくらはぎの肉離れを起こしてしまい、年内の会議やつどいは欠席させていただきました。その間にいろいろと考えた、私の夢物語の一端を述べさせていただきました。

新年からは会議やつどいにも参加するつもりですし、4月末からのNPT再検討会議への要請行動にはぜひ参加していきたいと思っています。

みなさんにおかれましては、ご健康に十分ご配慮いただきながら、本会の発展のため倍旧のご激励と物心とものご支援をお願い申し上げます。

II. 12/13 ヒロシマ・ナガサキを語り受け継ぐつどいのご報告

12月13日（土）主婦会館プラザエフB2 クララルテで開催した「ヒロシマ・ナガサキを語り受け継ぐつどい」は100名の参加で盛会のうちに終了することができました。当日、継承する会に正会員、賛助会員として各1名の方に入会いただき、会場カンパは14,100円、アンケートは35枚を回収することができました。

今回のつどいは、各地でヒロシマ・ナガサキを語り、受け継ぐ取り組みをしてきた方、これから何か始めようと考えている方、ちょっと関心があるんだけどという方…、さまざまな人たちが参加し、被爆70年、2015年NPT（核不拡散条約）再検討会議への行動をステップにして、核兵器が人類と共存できないことを、そして核兵器のない未来に向けて私たちに出来ることを共に考え、歩み、ネットワークを広げていくためのスタートになったのではないかと思います。



▲会場いっぱいの参加者



▲リレートークで発言する高校生

つどいは、伊藤事務局長の開会挨拶ののち、ウィーンで12月8日～9日に開催された第3回核兵器の非人道性に関する国際会議に日本被団協から代表のひとりとして参加された藤森俊希さんに高校生がインタビューする形で「被爆70年、核兵器のない未来に向けて私たちに出来ること」というテーマでお話を伺いました。

昨年12月に日本被団協とノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会は、被爆者と受け継ぎ手が協力して、被爆者一人ひとりの声に耳を傾け、語り合い、記録に残す、被爆の体験の継承を取り組んでいくこと、取り組んだ成果を世界と未来にむけて、それぞれの地域から発信していくことを呼びかけました。ネットワークでは8月と11月に被爆の証言を聞くつどいを開催しました。また、これまでに各地で被爆の証言を聞き、語り合い、記

録に残し、被爆者と語り合う取り組みがすすめられてきました。こうした取り組みをリレートークでつなぎました。また、東京にお住いの片山昇さん（13歳 広島被爆）と埼玉の坂下紀子さん（2歳 広島被爆）から、若い受け継ぎ手がインタビューする形で被爆の体験を証言していただきました。



▲被爆の証言（坂下さんと聞き手の鈴木さん）



▲中村里美さんのトークとライブ

ヒロシマ・ナガサキを歌で伝えたり、沼田鈴子さんをモデルにした映画『アオギリにたくして』をプロデュースしたり、パワフルな活動を続けている中村里美さんのミニコンサートは、歌と彼女のこれまでの経験に裏打ちされたトークが心に響きました。

後半のリレートークでは、地域に根ざした市民レベルの取り組みとして、埼玉のしらさぎ会が続けてきた埼玉県原爆慰霊式を市民団体が実行委員会をつくって支え引き継いでいく取り組み、若手研究者や教育現場での広島・長崎への修学旅行、インターネットでヒロシマ・ナガサキを発信するヒロシマ・アーカイブ、そして地域の被爆者の会の継承の取り組みとして岐朋会の活動を紹介していただきました。

つどいは津田塾大4年の鈴木美穂さんのまとめと閉会挨拶で時間より15分ほど超過して終了しました。

■ 鈴木美穂さんのまとめと閉会の挨拶

この活動をはじめる前、私はどちらかというと被爆者ではない人が記憶を語り継いでいくことは無理なのではないかと思って、かなり悲観的に考えていました。しかし被爆者の方と一緒に協力しながら、語り受け継ぐつどいを開催したりしていくことを通して、私たち若い世代でも、もちろん被爆者になりきることはできないかもしれないけれど、被爆者のお話に耳を傾けたり、お話に共感したり、被爆者の思いに寄り添ったりすることはできるんだと思いました。そういったひとつひとつの被爆者のお話を共有し、自分のこととして受けとめ、それについて考えていくこと、それをもとに行動していくこと。この一連の出来事が記憶の継承ということなのかなと考えるとそんなに難しいことではなくて、逆に

シンプルなことだと思いました。

誰にでも、またどんな形でも携わっていただけることですし、こういうことに興味を持ってくれる若者はたくさんいるんじゃないか。リレートークでも各地のいろいろな取り組みが紹介されましたが、それぞれの地域で来年の被爆70年を契機にして、自分の身近なところから、できることから、いろいろ取り組んでいきましょう。来年の秋にも、今日のようなイベントを行いたいと考えています。その時にはひとり3分でないと時間がカツカツになってしまうくらい、もっと多くの若者がこの活動に取り組んで、このネットワークをどんどん広げていきたいと思っています。

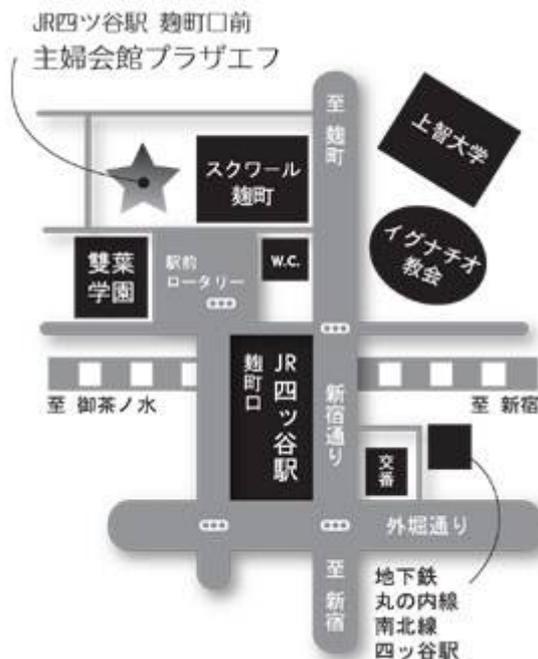
■ 寄せられた感想の一部をご紹介します。

- ヒロシマ・ナガサキの問題に取り組んでいる方々の抱えている悩みや問題には共通するところがあり、もっとお互いに学びあうことが必要だなと感じました。
- 各地での取り組みを聞いて、何かしなくてはいけないという思いがわいてきました。地域にいらっしゃる被爆者の方々からもっと話を聞き、多くの人に伝え、微力ながらも手伝っていきたくて強く思い、平和について考えるきっかけをつくっていきたくて思いました。
- 高校生、大学生、成人と戦争を知らない人たちが真剣に、真面目に、正面から向き合っていて原爆について考えてくれていることに感動いたしました。（被爆者）
- 片山さんが被爆された当時のことがよく分かり、次世代への命のバトンタッチをつなげてもらいたい気持ちが伝わりました。
- 被爆者でもある藤森氏の世界へ向けてのメッセージを受けとめたいと思います。2015年NPT再検討会議に向けての取り組みを、あらためて進めていく力がわきました。昨年のピースアクションに初めて参加されてから被爆者の体験聞き取り活動を始められた千葉の岡田様の話に感銘を受けました。
- ヒバクシャでなくてもできることは何か、何を行動するのか、口に出して言えるまでにはなっていないが一步は踏み出さないと、と思っています。閉会挨拶の鈴木美穂さんの言葉がグッと胸に来ました。
- 被爆の非人道性や悲惨さを後世に伝える継承運動がうねりとなっていることを感じました。健康にちょっと自信がないのですが、全ての人に協力したいと思います。（被爆者）
- 被爆者の方たちの話を聞くことの大変さ、話しを継承していくことの大切さ、伝え方の大切さについて考えさせられました。自分もなにかできることがあればと思います。

■「ヒロシマ・ナガサキを語り受け継ぐネットワーク」の次回日程

日程:2015年1月31日(土)14:00~16:00
場所:主婦会館プラザエフ5F会議室

内容:12/13つどいの振り返りと今後の取り組みについて ほか



■「ヒロシマ・ナガサキを

語り受け継ぐネットワーク」とは

日本被団協とノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会は、昨年12月に開催した「ヒロシマ・ナガサキを語り受け継ぐつどい」を機に、被爆者と受け継ぎ手が協力して、被爆者一人ひとりの声に耳を傾け、語り合い、記録に残す取り組みを呼びかけました。

この呼びかけにこたえた個人、グループ、団体のネットワークです。

『被爆者からのメッセージ』の制作や「被爆の証言を聞くつどい」、「ヒロシマ・ナガサキを語り受け継ぐつどい」などを企画してきました。

取り組みは継承ブログをご覧ください。

<http://keishoblog.com/>

どなたでも参加いただけます。

■この間、ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会聞き取られた被爆の証言は継承する会 web サイトでご覧いただけます。

<http://kiokuisan.com/> => 「資料集」 => 「証言集」 でご覧いただけます。

Ⅲ. 資料収集作業グループの報告

年内最後の被爆者運動資料の整理作業は、愛宕事務所において12月14、20、21日の3日間、9人、延べ12人の昭和女子大学の学生さんが参加して行われました。今回は歴史文化学科だけでなく、福祉社会学科、英語コミュニケーション学科のメンバーも加わってくれました。

日本被団協所蔵分を中心に、すでに目録どりが完了した史料は約2,000点。今回は、1点ずつ封筒に入れもんじょ箱に納められた故・藤平典さん（前日本被団協代表委員）の遺された資料の目録どりに始まりました。被団協運動の草創期から参加してきた須藤叔彦さん（群馬・群友会会長）の資料は、歴代代表理事や関東・甲信越ブロック各県役員のリストなど須藤さんならではの歴史を感じさせるもの。ブロックや県内の運動の発行物も多いのですが、きちんとファイルに収められているので作業はとんとんとはかどります。

各地の役員や物故者のご遺族からこれまでに寄贈された資料の最後は、兵庫の故・園辰之助さんのもの。特大3個と大1個、計4個の段ボールに県被団協の文書や神戸市をはじ

め芦屋、西宮市など県内各地域の被爆者の会、関係団体の資料、書籍・冊子類が混在しています。1点ずつ封筒に納めていく作業は、それらをおおまかに仕分けし、ホチキスなどの金具を取り除く作業を伴うだけに、なかなか手間がかかります。こつこつと手を動かし地味な作業をつづけながら、しかしとっても楽しげなのは、史料が大好きな若い女性たちだからでしょうか。最終日には、世界の地名や人名の「しりとり」で盛り上がりました。

指導にあたってくださる松田忍先生からは、これらの資料の意味を公にすることを考えようと、積極的なご提案もいただきました。

次回作業の計画は、学年末試験の終わる2～3月にかけて組むことができそうです。

なお、松田先生が昭和女子大の歴史ブログに、最新の作業風景を写真入りでアップしておられますのでご紹介します。

<http://content.swu.ac.jp/rekibun-blog/>

◆ご寄贈ありがとうございました

新日本婦人の会広島県本部より、同会発行の被爆体験集『木の葉のように焼かれて』全巻をご寄贈いただきました。

この被爆体験集の題名は、広島で被爆し、次男の史樹ちゃんを白血病で亡くした名越操さんの手記からとられたもの。50年前の8月からほぼ毎年のように発行しつづけ、今年で48集を数えています。

貴重な資料のご寄贈に、心よりお礼申し上げます。

IV. 継承センター設立委員会の報告

(1) 第4回会合を11月28日(金)に開催。主に建築部会より提案された「現段階に即したスペースについて(メモ)」と、2種類の図面について討議しました。規模のわかる完成予想図=本設計構想を数年先に想定することとし、その準備期間は既存の建物(スペース)を借用するなどしながら継承センターの中身をつくっていくことなどを確認しました。また、継承センターにおける「原爆文献・資料等」の収集方針について、関連専門分野を含め予備的な討議を進めました。「認定NPO法人」(現在、東京都に申請中)にかかわる税制上の優遇措置についても報告しました。

(2) 第5回会合を12月20日(土)に開催。これまで委員会で討議されてきた<A. 「継承・交流スペース」について><B. 記憶遺産館スペース」について>を反映した設計案を、建築部会より次回提案することなどを確認しました。また、「継承センターの電子データ化およびオンライン・コンテンツについて」「資金・宣伝関係の進行について」の討議をすすめました。次回会合を2015年1月24日(土)とし、「最終報告のまとめ」について検討します

V. 関連企画など

(1) 被爆者とサポーターの協働による「自分史」づくり

広島で、自分史『生きる』第5集刊行をめざし講演会

原爆被害者相談員の会（代表：三村正弘氏）は12月7日、広島市の中区地域福祉センターで、基本懇意見書にこだわる被爆者問題講演会を開催しました。

1980年12月、「原爆被爆者対策基本問題懇談会」（厚相の私的諮問機関）が戦争の犠牲は国民ひとしく受忍（がまん）せよと原爆被害への国家補償要求を拒む意見を答申しました。これに抗し、翌年6月に設立された広島の相談員の会は、81年から毎年12月に「…こだわる講演会」を開いてきました。第34回目となる今年は、「今、自分史を書くということ～被爆70年をふり返って～」をテーマに講演（講師：栗原淑江）と被爆者の自分史『生きる』第5集の刊行に向けた執筆希望者らとの打ち合わせが行われました。

同会が被爆者相談活動とならんで取り組んできた自分史づくりは1994年に始まり、これまでに刊行された『生きる』1～4集には延べ47人（うち韓国籍6人を含む）が執筆しています。人生をふり返り社会や歴史の動きと重ねて自分史を書く被爆者は、書きながら自身にとっての戦争・原爆を見つめなおし、苦しみをのりこえて生きてきた意味をたしかめ、生きた証を子や孫たちに残してきました。また、狭義の被爆体験だけでなく丸ごとの人生をつづる自分史の手法は、読む人たちにも、同時代を生きる人間の苦しみ、悲しみ、喜びをとおして、共感を広げてきました。

今回の参加者には、被爆時の記憶のない胎内被爆者や若年時の被爆者も多く、人生の転機や被爆者としての自覚が深まっていく過程をみつめてつづる意味はいつそう大きくなってきているように思います。講演会には相談員の会の設立時のメンバーも多く参加され、前回4集の編集を担当された現役世代の相談員が自信をもって運営する姿に、サポーターの側の世代継承もたしかにすすめられていることがうかがわれ、実に頼もしく感じました。

自分史を書く被爆者とそれをいっしょに読みながら励ましサポートするワーカーらの協働作業による自分史づくりは、原爆体験継承のユニークで貴重な実践の場でもあるでしょう。

（栗原）

(2) 若手研究者による原爆体験研究発表会

『長崎原爆被災の記憶』をめぐる

11月16日、慶應義塾大学三田キャンパスにおいて、若手研究者による原爆体験研究発表会が開かれました。

ここ数年、広島・長崎の原爆体験を研究テーマに、博士号を取得する若手研究者が幾人も輩出しています。その成果を、専門家にとどまらず、被爆者や一般市民にも開き、ともに学び合いながら今後の研究の活性化につなぐことができたらと願い、有志4名（有末

賢・浜日出夫・濱谷正晴・栗原淑江)が発起人となり企画。日本原水爆被害者団体協議会ならびにノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会のご賛同を得て、実現したものです。

今回の報告者は、高山真さん(35歳。現在、長崎大学核兵器廃絶研究センター客員研究員)。その学位論文『長崎原爆被災の記憶』は、2005年3月から長崎に定期的に訪れ、2008年4月からは長崎に生活の中心を移してのフィールドワークのなかで、「非被爆者である〈わたし〉」が問い続けたテーマをみつめ・深めていったあゆみを綴った労作です。

会場となった教室には、首都圏の被爆者24人を含む60人が参集。遠方からの参加者も交えた多彩な顔ぶれに、このテーマへの関心の深さがうかがわれます。

高山さんは、極限的体験(語りえないもの)は言語によりいかに表現できるのか、体験のない者はそれをどのように受け止めればよいのか、という問題意識からはじめ、少年時に被爆した3人の被爆者——長年の沈黙を経てようやく語ることができるようになったTさん、平和教育という実践との出会いにより語りはじめたYさん、他の被爆者との継続的なコミュニケーションを経て被爆者として深まってきたMさん——との対話的なインタビューをつうじて把握したライフストーリーを紹介。三人三様の生き方(軌跡)を追いながら、ほかならぬ被爆者自身の中にある「被爆者になる」という過程に着目し、そこに、被爆者自身の「語りえないものからの解放の方途」と体験継承の可能性があると語りました。

報告を受けての討議では、とりわけ「被爆者になる」という点をめぐっての活発な発言がつつきました。体験の記憶のない自分に語る資格があるのかと、悩みながら証言活動をしてきた「若い」被爆者らの、この報告に励まされたというこえ。このとらえ方に共感しながらも、人生すべて「被爆者」をめざす途上、「被爆者になった」とはどこで、どの時点で言えるのか?あるいは、「被爆者になる」ということには、被爆者が被爆者として生きるとはっきり覚悟を決めたということと、非被爆者が被爆者の体験を受けとめながら継承者になっていく過程、という2つの面があり、区別して考える必要があるのではないかとといった疑問など。また、小学校の平和学習を何年も続ける中で、話ができる関係ができていき、話す中身が変わってきた。私自身の進化にとって、聞く側の役割、対話の役割はとても大きい(東京・胎内被爆)、「われわれはすべてヒロシマの生存者である」と、生存者に力点をおいてとらえれば、死者と生存者との関係性の問題として、日本人、世界の人々へと、被ばくの輪の中で生きていることをより広がりをもって理解できるのではないかと(有末さん)、といった発言も示唆的でした。

最後に、呼びかけ人の浜さんはこうしめくりました。

ふつう博士論文は、公開審査会が終わって学位が授与されると図書館に納められ、その後は誰一人読まれることはない。こんなに多くの方が、遠方からも参加してくれ、高山さんにとっては今日が本当の博士論文公開審査会だったのではないかと。これはとても幸せな博士論文だ。

「被爆者になる」という思想は、単に学術的な価値だけでなく、継承へのヒントとして社会的な意義ももっている。高山さんにはさらに自分の思想を鍛えなおしてほしいし、み

なさんには、この思想の実践的有効性を確かめていただきたいと思います。

《書籍の紹介》

■ 橋爪 文『ヒロシマからの出発』

発行所：(株)トモコーポレーション

〒730-0012 広島市中区上八丁堀8-14 安芸リーガルビル2F

電話 082-502-0428

定価：1800円+税、送料1冊250円

真っ青な表紙、その静謐な美しさに目を奪われます。そして、帯にある詩「永遠の青」…。この装丁に込められた橋爪さんの想いに深くうたれました。

『少女・十四歳の原爆体験記』（2001年）の出版以来、自身の〈原爆体験〉（「あの日」の体験はもとより、今日まで原爆に抗い被爆者として生きて来られた軌跡も含めて）について、詩や手記に書き、また世界中に語りつづけてこられた橋爪さんが、この夏、2011年3.11後に出した新版にさらに加筆し、『ヒロシマからの出発』を出版されました。

ここには、69年経ってはじめて綴り発表されたという妹さんや弟さんらご家族のみなさんのことも記されています。原爆とはこれほどの被害を人々におよぼして、苦しみ、生き残った者のところに深く、重い傷を刻み込むものであることを、あらためて教えられます。自身の体験をふり返り、何度も書き加え、書き改めながら出版を重ねてこられた橋爪さんのお仕事には、橋爪さんの被爆者としての試行錯誤の歩みが如実に記されていて、そこからは、原爆がおよぼす人間の苦しみについて、核兵器・核をなくしていくための人間の営みについて、私たち体験のないものが考えつづけていくための様々なヒントをいただけるような気がします。

VI. 2014年度会費納入と継承する会「紹介パンフ」普及のお願い

継承する会の財政状態は、残念ながら活動の進展に見合うものとはなっておらず、11月末現在で単年度赤字となっています。振込用紙を同封させていただきますので、今年度の会費、賛助会費の納入にご協力くださいますようお願いいたします（すでにお納めいただいているみなさまには振込用紙は入っておりません）。ご送金と前後した場合はお許してください。領収証が必要な方はご連絡下さい。領収証をお送りいたします。また、振込用紙には正会員、賛助会員、賛助団体、寄付金の該当項目にチェックを入れてお送りください。

継承する会への参加、協力を広く呼びかけ、会の財政を支えるためにも、継承する会とその活動を紹介するパンフレット『NO MORE HIBAKUSHA 受け継いで、未来へ』の大量普及・活用にご協力ください。（頒価 1部:200円、送料実費）